

令和5年度 第48回「北の住まい」住宅設計コンペ 入賞作品展

「北の住まい」住宅設計コンペは、当協会の前身である「社団法人北海道建築設計監理協会」の主催で、昭和44年(1969年)8月に「北国の住まい住宅設計コンペ」としてスタートし、今回で48回目の開催となりました。

今回の課題は、「旅行者の家」です。42作品が応募されました。

設計競技審査委員会において行われた二次審査と公開で行われた最終審査では、米田委員長をはじめとする構成メンバーによって多様な意見と評価・感想が交わされ、慎重かつ闊達な議論の交換が行われました。その後数回の投票の結果、つぎの皆様が受賞されました。

入賞作品のほか委員長による総評、委員による各作品の講評を掲載しておりますので、ご覧ください。

■主催 (一社)北海道建築士事務所協会

(後援) 北海道、(一財)北海道建築指導センター、(一社)北海道建築士会、

(公社)日本建築家協会北海道支部、(一社)日本建築学会北海道支部、(株)北海道建設新聞社

【設計競技審査委員会:構成メンバー】(委員は五十音順)

委員長	米田浩志	北海学園大学工学部建築学科 教授
委員	赤坂真一郎	(株)アカサカシンイチロウアトリエ 代表取締役
委員	小澤丈夫	北海道大学大学院工学研究院 教授
委員	小西彦仁	ヒココニシアーキテクチュア(株) 代表取締役
委員	佐藤 孝	北海道科学大学工学部 名誉教授
委員	澤田貞和	(株)日本工房 会長
委員	松田真人	(株)都市設計研究所 代表取締役

【課題】

「旅行者の家」

今年5月に新型コロナウイルス感染症の位置づけが変更され、久しぶりに私たちの日常生活や、まちの賑わいが戻りつつあります。

海外からの旅行者の入国制限もなくなり、国内外から北海道を訪れる旅行者が増えています。

道内には、山や海、大地など四季を通じて魅力的な風景や場所があります。そして、人々が住むまちも魅力です。

具体的に場所を設定し、北海道に浸(ひた)る「旅行者の家」設計してください。

【賞金】

最優秀賞	25万円	(1点)
優秀賞	5万円	(2点)
奨励賞	2万円	(4点)

【審査経過】

一次審査	10月3日(火)～5日(木)	14作品を選出
二次審査	10月30日(月)10:00～	一次審査通過作品から10作品を選出
最終審査	10月30日(月)13:00～	二次審査通過作品から各賞計7作品を決定

【受賞作品及び受賞者】

最優秀賞作品1点、優秀賞作品2点、奨励賞作品4点は、つぎのとおりです。

賞	作品名	作者	
最優秀賞	湖畔の器	共同 作品	河村 健太郎 北海道科学大学 3年
			小林 温佳 北海道科学大学 3年
優秀賞①	そこに在る		高橋 遼乃介 星槎道都大学 4年
優秀賞②	雪の満ち引き	共同 作品	杉下 英宇 北海道科学大学 3年
			奥山 颯斗 北海道科学大学 3年
奨励賞①	灯台守の家	共同 作品	原田 耕太 室蘭工業大学大学院 2年
			藤村 柊斗 室蘭工業大学 4年
奨励賞②	赤い森の家		高橋 来未 学校法人美専学園 北海道 芸術デザイン専門学校 2年
奨励賞③	胎動する環堵	共同 作品	奥野 柊也 堀尾浩建築設計事務所
			塩野谷 基悟 フリーランス
奨励賞④	情景に宿る	共同 作品	飯田 二千翔 北海道科学大学大学院 1年
			白石 航大 (株)都市設計研究所

注) 優秀賞以下の○数字は賞の順位を示すものではありません。



二次審査風景



令和5年10月30日(月)午前
於)設計会館8階A会議室



最終審査風景 (公開形式)

令和5年10月30日(月)午後
於)設計会館8階A会議室



第48回 「北の住まい」住宅設計コンペ 総 評

今年に入り新型コロナウイルスの感染症法上の位置づけが変更された。それに伴い徐々にかつての社会生活が取り戻されるようになってきた。そのような状況の変化によって、人々の行動が拡がり、国内外を含め旅行者も増えてきた。特に北海道は、もともと旅行者が多く訪れる環境ということもあって、旅行者数の変化が顕著に現れている。その旅行者を受け入れる北海道の宿泊環境は、さまざまなスタイルとして存在している。しかし、多様化する旅行者に必ずしも応えられているとは言えない。北海道の魅力は、人々が生活するまち、そして原生的な風景が広がる自然環境にある。今回のコンペでは、北海道を訪れる旅行者に、その魅力を享受してもらえよう、体験にとどまらず、浸（ひた）れる「旅行者の家」のあり方を問いかけた。かつての日常生活が戻って来た中、改めて、旅行による新たな体感性を追究する意義は大きい。

北の住まい住宅設計コンペは、1969年にスタートした。今年2023年、48回目を迎える。これまでも様々な課題と共に、北海道住宅の可能性を探求してきた。今回は、新型コロナウイルス感染症から解放されたことを契機に、改めて北海道と共にあるべき家を問うコンペであった。今年の作品応募は、9月29日に締め切った。応募総数は42作品であった。昨年よりも若干減少したが、ほぼ平均的な数と言える。その後、第1次審査は、10月3日から5日の3日間で行われた。審査委員は各自7票を持ち作品を選出した。42作品中1票でも投じられた作品を第1次審査作品とした。今年の通過作品は21作品であった。その後、第2次審査を10月30日の午前に行い、改めて各審査委員間で議論を重ねながら、投票によって21作品から10作品を選出した。この10作品はベスト10入賞作品となる。さらに同日午後、第3次審査を公開形式で行った。改めて議論を重ね、そして数回による投票によって、最優秀賞作品1点、優秀賞作品2点、奨励賞作品4点を決定した。

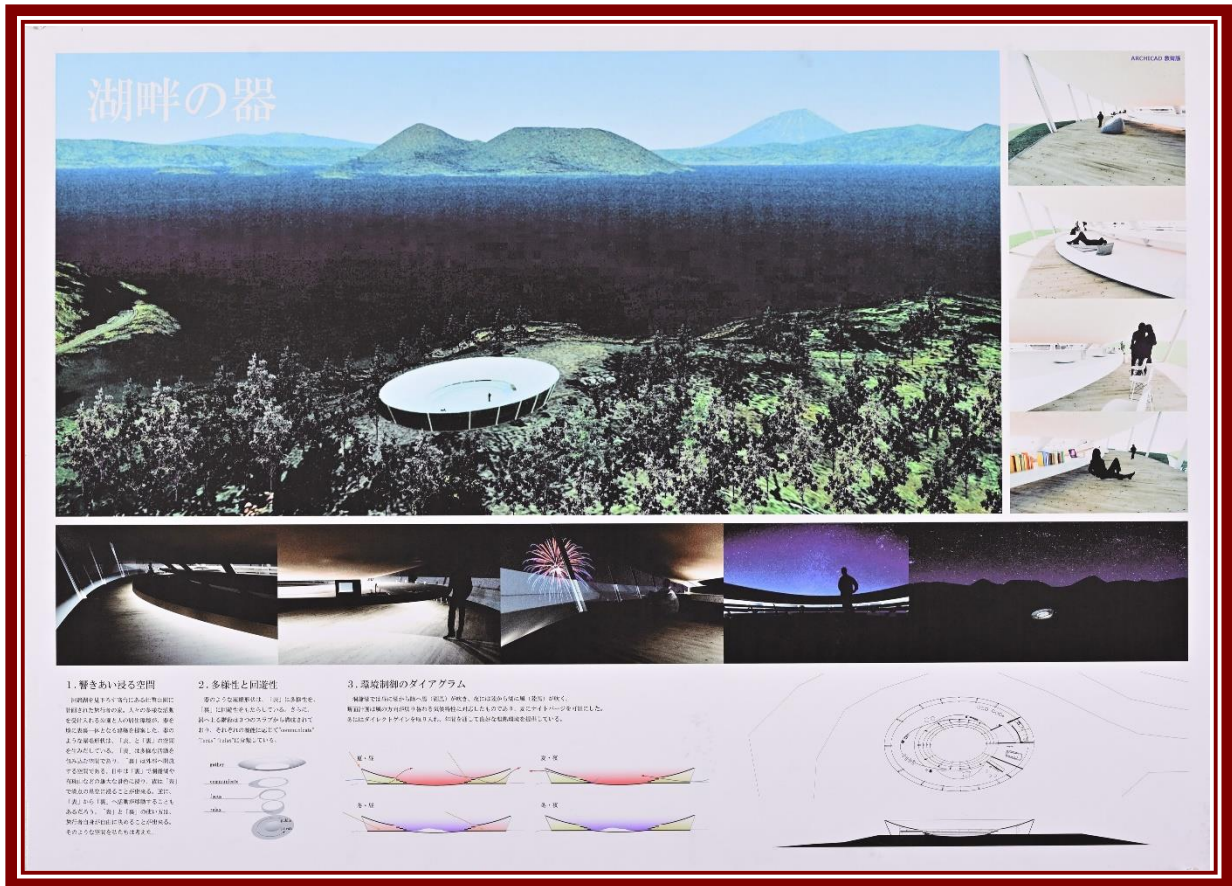
最優秀賞作品「湖畔の器」(河村・小林案)は、すり鉢状のコート空間に大きな特徴がある。このコート空間は、大自然が広がる外部環境に対して大胆な開き方をしていた。すり鉢状のコートは、空をダイナミックに切り取り、そして新たな地平線をも想起させる風景を生み出していた。自然の中に人工性を介しながら、マクロ的な自然を体感させる空間操作は秀逸であった。そして、優秀賞作品「そこに在る。」(高橋案)は、北海道らしい平原の広がりがある中に、幾何学的なオブジェクトを配置していた。柱、スラブ、階段を単純化した基本構成は、コルビュジェのドミノシステムを彷彿させる。これらの建築要素によって自然とシームレスな関係を生み出している。このような関係は、自然と建築の間に新たな共生性を生み出すであろう。求心的でもあり、遠心的でもあるコート空間の演出は巧みであった。もう一つの優秀賞作品「雪の満ち引き」(杉下・奥山案)は、雪との関係を新たに探求した作品であった。雪の変化は多様である。雪は冬において大きな支配力を持つが、部分においては変幻自在の不定形な存在である。このような雪の特性を積極的に住宅に取り入れると北海道の冬の生活はもっと豊かになるに違いない。雪の層の美的表現や雪の風景操作は大いに評価できる。そして、奨励賞4作品もそれぞれにテーマと向きあった特徴的な作品であった。

今回の北の住まい住宅設計コンペにおいても、応募作品から大いに刺激を受けることができた。この刺激は、制作者たちの建築に対する情熱と換言することができる。創造する上での情熱は、新たな建築を生み出していくための原動力になるだろう。皆さんのさらなるご活躍を期待したい。

設計競技審査委員長 米田 浩志

【最優秀賞】「作品名」 湖畔の器

「作者」 河村健太郎／小林温佳



< 講 評 >

雄大な洞爺湖を見下ろす壮瞥公園に、器状の楕円曲面が置かれている様がシンプルで美しい。

楕円の中心にある中庭状空間の周囲に、外周から内側に向けた下り勾配をもつリング状のスラブを浮かべることによって、スラブ下の回遊空間と、近・中景への視界を遮断し大空に向かって開かれたスラブ上の器状空間が、ひとつの中庭を囲んでつくられている。設計者は、ここに表と裏の関係を見立てる。

これは、旅人にひと時の安らぎを与えるひとつ屋根の下の居住空間と、雄大な星空を通じて感じさせられる宇宙への無限の開放空間との対比であると同時に、四季と一日の時間の流れの中で絶えず移ろい続ける木々の姿、眺望、空気、日差しを、表裏一体の関係の中に体験できる住まいの提案として諒解でき、審査員から高い評価を受け最優秀賞となった。

最後に、審査委員会では、緩やかな傾斜地を選定するなど、地面との積極的な対話のかたちを検討することによって、さらに複合的な価値をもつ住まいの可能性が開けるのではないかと意見がだされたことを付け加えておきたい。

設計競技審査委員会

委員 小澤 丈夫

【優秀賞①】「作品名」そこに在る。

「作者」高橋遼乃介



<講評>

高橋さんの設定した場所は、北海道の広大な大地を感じる、道東・中標津の牧草地である。その大地の一部が切り抜かれて、内に居る者は、グランドレベルに沿った広大なパノラマを体感する。

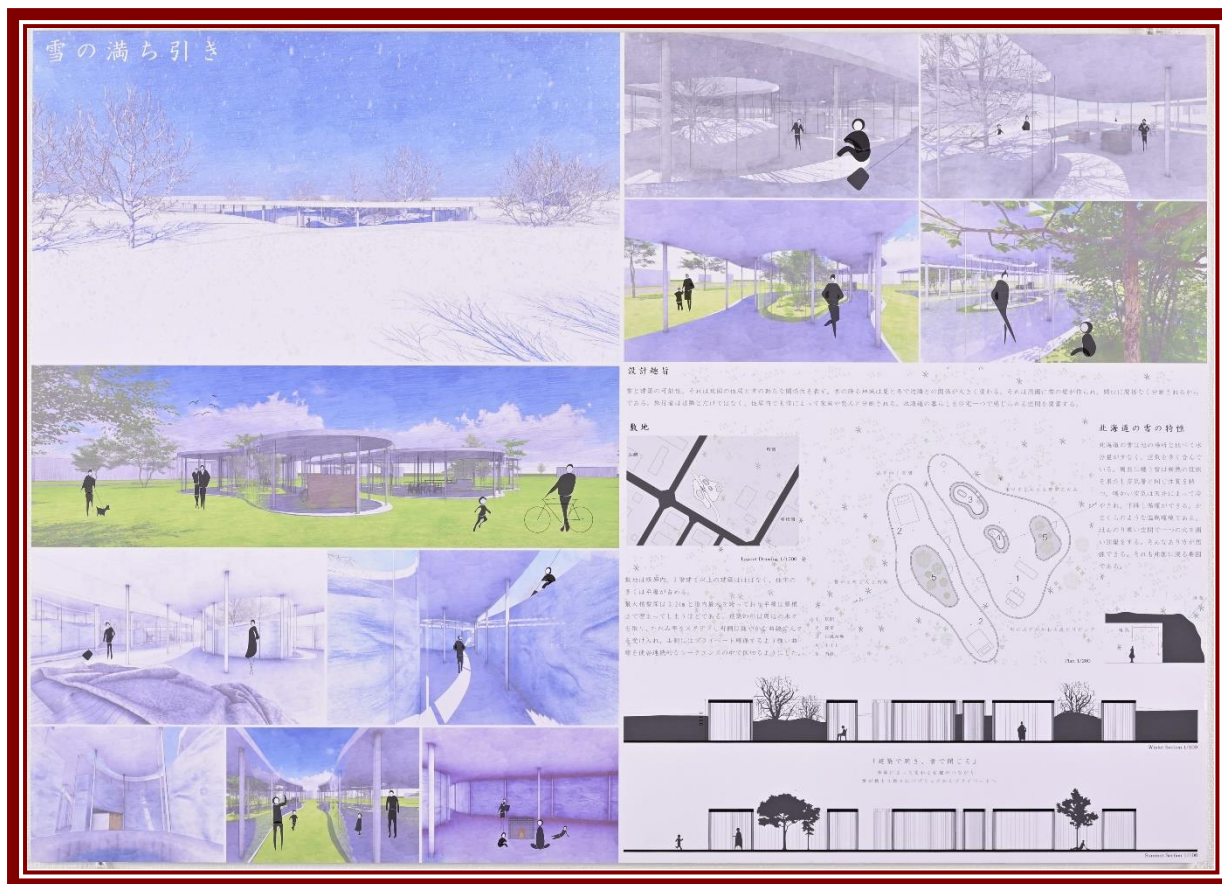
また、切り抜かれた円形プレートは、斜めに置かれて屋根・テラスとなり、広大な遠景領域の内に自分が置かれ、この場所に浸る。

これは、大地に対する円と正方形プランの建築であり、上昇する階段は天と地をつなぐ図式であり、実存空間である。そして、環境内に定位する居場所を求めた美しいプランの建築である。

設計競技審査委員会

委員 佐藤 孝

【優秀賞②】 「作品名」 雪の満ち引き 「作者」 杉下英宇／奥山颯斗



< 講 評 >

北海道幌加内町に敷地を想定したこの計画は、この地の最大積雪深度 3m 強によりガラス張りの住居の周囲が雪の壁となり夏には見えていた各室が分断されることに着目し計画された案である。

積雪によるガラス張りの家の空間分節は、北国ならではのアイデアであり異空間を想像させる。しかしプレゼンにあるようなガラスに密着した雪の状態には室内の暖気による熱伝導により起らず十数センチ離れると考える。また屋根の積雪はどこにいったのだろうかなど、まだまだつめる要素がある。

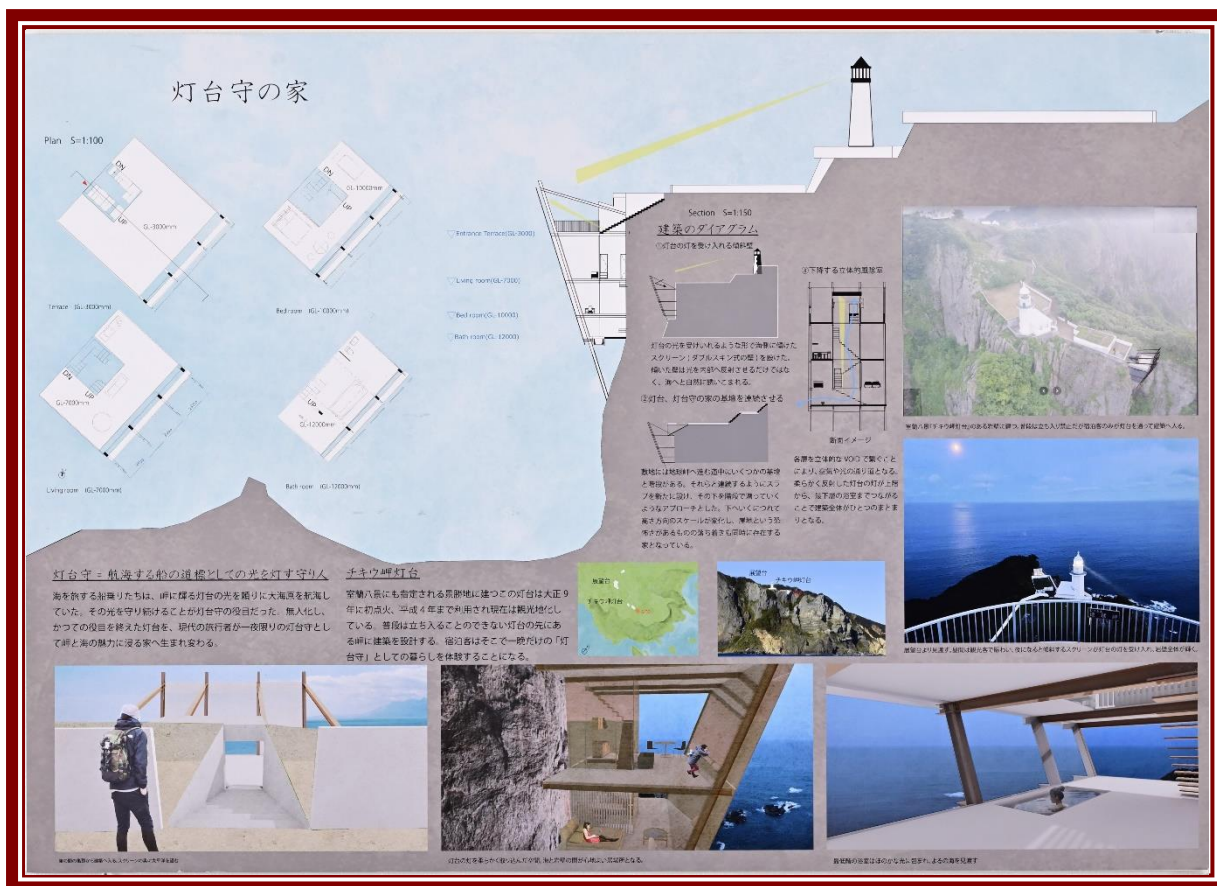
だが北国の家の新しい住まい方の提案としては魅力ある作品であるには違いなく評価された。

設計競技審査委員会

委員 小西 彦仁

【奨励賞①】「作品名」 灯台守の家

「作者」 原田耕太／藤村柊斗



< 講 評 >

敷地は室蘭八景に指定されている地球岬。平成 4 年まで使われていた灯台があり観光地となっている。宿泊客が一晩だけ灯台守をして過ごす家を提案。断崖絶壁を背に、見渡す限りの水平線を楽しみ、人目を気にせず独り占めの夜を過ごせる。建物はシンプルに鉄骨とガラスとスラブで構成されていて過ごし方と時間が自由。

人を寄せ付けない場所にあえて、癒しを設けた非日常空間。
屋上から階を下がるに従って、プライベートになり、開放感と独り占め感が特徴的である。

より軽くあたたかい宿泊空間が、絶壁に浮かぶ姿を想像するには少しデザイン不足だが、敷地の魅力を高め、旅を楽しむ個性ある時間と場所を感じる見事な作品です。

設計競技審査委員会

委員 澤田 貞和

【奨励賞②】「作品名」 赤い森の家

「作者」 高橋来未



<講評>

高橋さんは、能取湖の湿地に生息する一週間だけ赤く染まるサンゴ草（アケシソウ）に魅せられ、この時期、この場所に浸る建築を求めた。

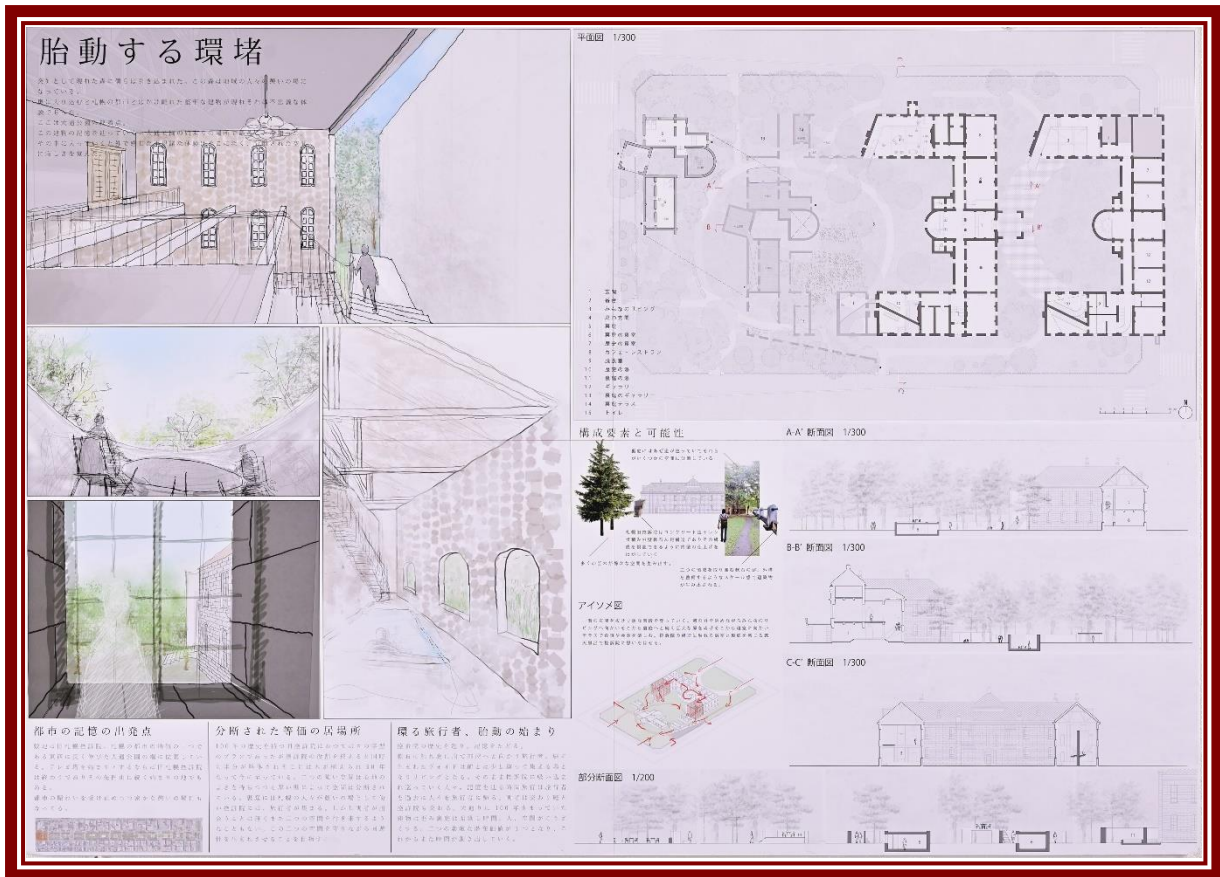
絶滅危惧種の能取湖アケシソウは、湿地の乾燥による危機的な状況に追い込まれたこともあり、この作品の場所想定と建築行為のあり方に審査では疑問もあった。

しかし、大きく描かれた夕景の湖と建築のグラフィックは、美しく、審査員の眼を魅了した。ピロティや外壁の金属素材には、サンゴ草や湖の風景が映り、風圧等の水平力を保つ線材の構造など、湿地を考慮した繊細で魅力的な建築として評価された。

設計競技審査委員会

委員 佐藤 孝

【奨励賞③】「作品名」胎動する環堵 「作者」奥野柁也／塩野谷基悟



＜講評＞

この提案は大通りにある歴史的建造物の再生プロジェクトであり、おそらく個人の住宅ではなく旅行者の宿泊施設と思われます。提案の題名である「環堵」とは家を取り巻く垣根のことだそうです。大通りを取り巻く垣根なのか、垣根のような建物のことなのかわかりません。我々も知らなかったのですが、控訴院が当初は口の字型の建物であり、その後、現在の様な一文字型の建物になったのだそうです。

元々の建物の外郭を残しながら、寝室や食事空間や浴室をちりばめ、前面(東側)には半地下に埋め込まれた寝室があり、その屋根の上は屋上庭園(テラス)となっていて大通公園と一体化させようとしているようです。

元々の外郭を残しながら現在のニーズに基づいた宿泊施設としての機能を植え付けているようです。風致地区なのでかなり難しいことですが、あの場所にこのような空間が存在し、それが質の高い場所になっていたら素晴らしい「旅行者の家」になるものと思われます。

凡そ150年の間に植民され、原始が一気に現代化された北海道では、本州とは異なり時間が凝縮されています。この時間を感じながら都市を味わうのも旅行の醍醐味です。何も素晴らしい自然の景観だけが北海道の財産ではありません。その意味で、この作品は、我々に別の北海道というものを教えてくれています。但し、どこまで何を残し、何を提案しているかの区別が不明確であり、そして実現できている空間の質がどのように素晴らしいか、更に大通公園とどのように一体化しているのかのアピールがやや弱いのが残念でなりません。

設計競技審査委員会
委員 松田 真人

【奨励賞④】「作品名」 情景に宿る 「作者」 飯田二千翔／白石航大



< 講 評 >

農村風景を背にしたオープンな木造ドームフレームの下に、植物と共生する平屋住宅が佇んでいる。

住まいとして見ると半屋外的な中間領域を囲うドームの高さや平面的な広がりやサイズ設定は秀逸で、積雪や日影などを上手く利用しながら四季を通じて様々なアクティビティを授容できる、居心地の良い案に仕上がっている。

しかしながら住宅平面や中間領域の形状が、自立しているはずのドームフレームのグリッドに支配されていることには、やや疑問を感じた。

「北の住まい」のウイークポイントである屋根構造や性能がドームフレームによって担保されるのならば、その下にはグリッドルールに縛られない、もっと自由で大胆な「旅行者のため」の空間が展開できたのではなかろうか。

設計競技審査委員会

委員 赤坂 真一郎